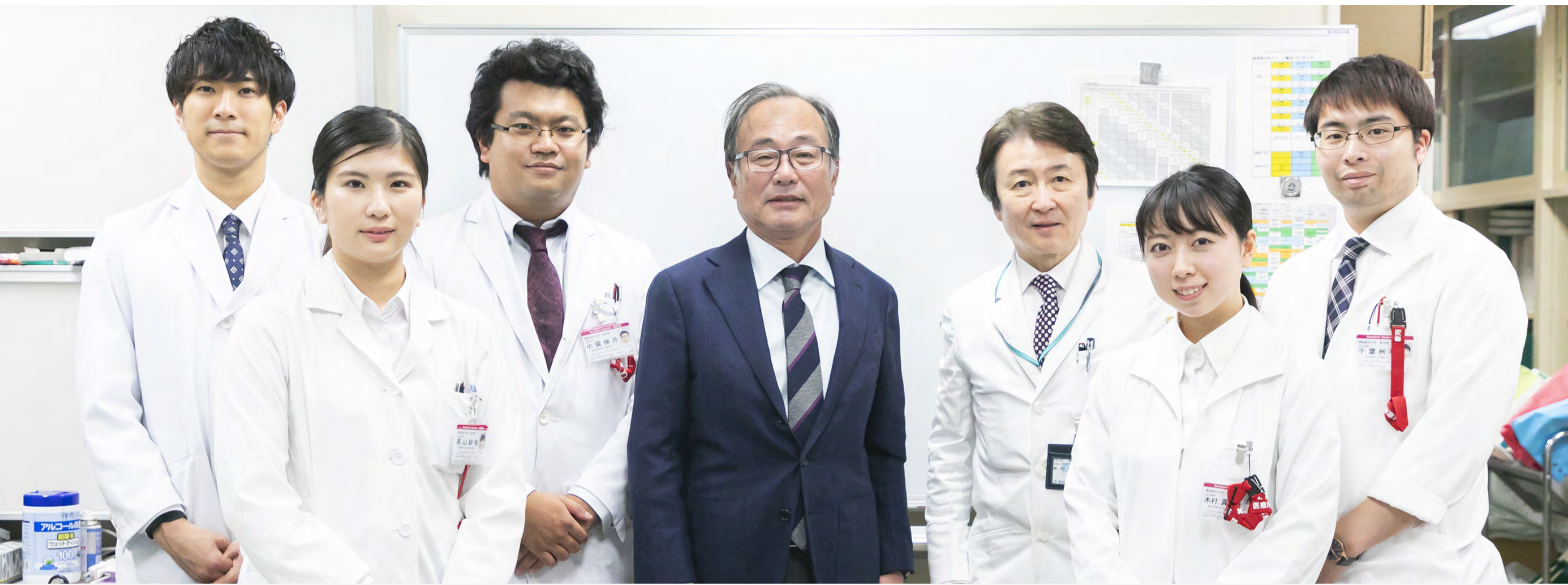


獨協医科大学で特別講義を行いました。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2019年12月11日（水）、私が特任教授を務める獨協医科大学（栃木県下都賀郡壬生町）で、特別講義を実施しました。私の母校でもある同校を訪れるのは、2014年に教職員を対象に行った講演以来5年ぶり。同校副学長で内科学（神経）の教授を務められている平田幸一先生が私と学生時代の同級生だったこともあり、今回は平田先生の下で臨床実習中の5人の5年生と対談形式の講義を行いました。

今回の講義で私がテーマにしたのは、故武見太郎先生が残された言葉である「医療は医学の社会的適用である」でした。これは、長年日本医師会の会長を務められ、日本の医療に多大な貢献をされた武見先生の言葉の中でも、私が最も好きなものです。学生たちは今、医学を学んでいます。医師になって自分の専門の医科ができたから、それに関するどんな病気でも治せるようなスキルを身に付けなければいけません。しかしそのスキルをどのように使うかは、社会に応じて変わります。

医療には、お金がかかります。医療費に関しては、昔から大きな議論的になってきました。「医療費亡国論」という言葉があるほどです。国ではありませんが、北海道にあった夕張市立総合病院は、大きな負債を抱え、夕張市が財政破綻する一因になりました。市が破綻すると、病院だけではなく水道や上下水道など市が提供するあらゆる行政サービスが停止することになります。また、医療費が原因ではありませんが、かつてソ連が崩壊したときには、モスクワ市民が行列を作って、パンとスープの配給を受けていました。その映像を見たときに、国が滅びることが現実であり、絶対に国を滅ぼしてはいけないと強く思いました。医療は、使い方を誤ると、国を滅ぼす可能性があるのです。



私は、医学部生時代に「人の命は地球より重い」と教わりました。大学卒業後、研修医として大学病院に勤め始めた頃に、ある著名人が入院してきたことがあります。その著名人の治療には、大学病院が全力を挙げて取り組み、無事に退院させることができました。もちろんそれは良いことなのですが、一方で私が感じたのは「人の命は平等ではない」ということです。他の患者さんにはしないような、手厚い治療が行われていました。

このように現実には人の命は平等ではありませんが、人間の尊厳は公平に扱うべきだと私は思います。公平に扱うとはどういうことかと言うと、社会に合った医療を医師が提供するということです。今、世間で「ACP」という言葉が大変話題になっています。ACPでは、患者さんやそのご家族と話し合いながらも、医師がイニシアチブを取らなければいけません。ご家族は、1秒でも長く患者さんに生きて欲しいと思うものです。しかし、それは患者さん本人を苦しめることになり、引いては国を苦しめることにもなりかねない。医師がご家族から信頼を得た上で、そのことを説明すれば、理解していただけるはず。社会に適用した医療を行うためには、医師が患者さんやそのご家族との信頼関係を築くことがその第一歩になる、ということを学生の皆さんにお話しました。



硬いテーマの後は、同じ大学の先輩、後輩として、学生の皆さんが希望する医科や日頃の生活、私の学生時代についてなど、ざっくばらんに話をしました。私は獨協医科大学の2期生で、当時の教授は全員他大学の出身でした。しかし、現在は平田先生をはじめ同校出身の教授がたくさんいます。平田先生は、獨協医科大学病院の院長も兼任されており、身近に良いお手本がいるのは大変良いことだと思います。また、私が学生の頃に比べると、今の学生は大変真面目です。獨協医科大学で多くのことを学び、一人でも多くの患者さんを救える良い医師になってほしいと願っています。



講義の後は、学長の吉田謙一郎先生にごあいさつするため、学長室にうかがいました。現在、健育会と獨協医科大学病院が協力して、リハビリ施設などを作る構想があり、合わせてその話もしてきました。獨協医科大学は、併設の病院の他に埼玉医療センターや日光医療センターなどもあり、私の在学時よりもずいぶん大きくなっています。母校が発展するのはOBとして純粋に誇らしい上に、健育会もその役に立てると思うと感無量です。今後もさまざまな形で同校の発展に貢献すると同時に、現役医学部生たちともまた話をしたいと思っています。



なお、獨協医科大学の前の通りは、550mにわたって約200本のイチョウの木が植えられ、四季折々の景観を楽しめる人気の撮影スポットになっているそうです。さらに、冬の日没後は、病院正面玄関前の木がライトアップ。現在の獨協医科大生たちが卒業して社会で活躍するようになると、学生時代の記憶の1シーンとして思い出されるのかもしれない。

